## ４７．三谷　康範氏（国立大学法人九州工業大学　学長）

**「不可能を可能にする
『チャレンジングなまち』であってほしい。」**

**三谷　康範**（みたに　やすのり）
愛媛県出身。
大阪大学大学院工学研究科修了。工学博士。
大阪大学工学部助教授、米国カリフォルニア大学バークレー校客員研究員等を経て、九州工業大学工学部電気工学科　教授に就任。
2022 年４月から、九州工業大学学長。

### 「成功体験を現在の視点で引き継いでいく」

北九州市は歴史的に、かつての八幡製鐵所等近代産業における成功や公害克服等の成功体験が蓄積されています。それらの歴史は大切にしなければならない一方で、過度に引きずられ、そのモデルと同じように行えば成功すると考えてしまうと発展は無くなってしまいます。

今の世の中では、過去の成功体験をどのように置き換えれば成立するのかといったことを考え、引き継いでいくのかがポイントです。例えば、過去の製鉄業の発展を、今成立する話に置き換えると、「再生可能エネルギー」「循環リサイクル」「長寿イノベーション（長寿社会における社会課題に対応するためイノベーションをどのように起こしていくのか）」といった考え方の重要性に気付くことができます。つまり、過去のモデルに、ものづくりの基盤と DX、AI 等を付け加えて、どう新しい発想に置き換えていくのかというところに尽きるのではないでしょうか。

今後、少子高齢化などの社会課題について、先進技術を掛け合わせることで解決するにあたって、その技術の組み合わせは思い切ったものである必要があります。

北九州市には、社会課題がたくさんあることに加えて、ものづくりの技術もあるため、北九州市を社会実装という観点から考えると様々な実験ができるポテンシャルがあると考えています。

### 「社会基盤を活用し、圏域としての発展を」

ある時期、このまちは、日本の中心として機能していたという経緯もあり、病院などを含め様々な社会基盤が揃っています。よく比較対象となる福岡市は、都市インフラとして圧倒的な力を持っています。北九州市は、そこに隣接・接続している価値を生かし、ともに発展するという方法をとれば良いと思います。

また、企業にとって労働力・技術者の不足が大きな社会問題になっている背景もあり、外国人人材の活用を進めていく必要があります。その中で、住居費の安さには、外国人人材を呼び込む際に大きなアピールポイントになるのではないでしょうか。

今後、企業とうまくタイアップし、大学を活用して技術者が学べる環境を整え、地域に根付いていただくとともに、地域の方々も、もう一度大学で学ぶことができる仕組みをつくることができれば、都市の価値は上がっていくと考えています。

### 「大学も活用しチャレンジできるまちづくり」

大学としても、今後、色々なことを試すことができる場をつくっていきたいと考えていま

す。例えば、スタートアップが何かを試行する際に、社会実験として様々なことにチャレンジできるようにすれば、おのずと人が集まってくるのではないでしょうか。

また、これまでも市の支援により、民間企業の実証が可能となった成功体験があります。今後も行政として特区制度の活用による規制緩和をはじめとして支援し、「北九州市なら新規ビジネスの規制をクリアできる」、「北九州市に行けばなんとかなる」というイメージがより強固にできれば、圏域全体の発展にもつながるのではないでしょうか。

### 「GX と街のコンセプトで企業誘致を」

GX は現在の方針で進めていけば良いと思います。将来を見据えると、脱炭素の経営をしなければ、企業価値が下がる時代となると考えています。従って、脱炭素、安価な土地代といった企業誘致の条件を整えていくことが大事になるのではないでしょうか。

企業誘致にあたっては、あえてターゲットを絞らずとも、「挑戦できるまち」のコンセプトさえしっかりしていれば、自然と企業が集まるものと考えています。

単に「災害が少ない」ではなく具体的な数値実績ベースで発信をしていくことが大切です。

### 「DX、AI を進めることで社会課題解決へ」

DX、AI をいかに使えるものにもっていくかが問題です。ある分野に DX、AI を導入しようとすると規制の障壁が発生しがちですが、それを打ち破ることができれば「挑戦できるまち」は必ず出来上がります。特に医療・交通分野についてはかなり規制を打ち破る必要があるでしょう。

また、DX、AI を導入するにあたって、社会課題を解決できる手段として、市民を巻き込んだ形で取組を広げていくことが望ましいと考えます。参加する人にも価値が生まれることで、「DX、AI を試せるまち」という他ではできないこととして差別化できれば良いですね。

行政としては、規制のクリア等に関してサポート体制を構築していくことが重要です。市が一緒に解決してくれるという姿勢を見せれば、相談は来るはずです。

新しい取組を企業もビジネスチャンスだと捉え、実証実験等に協力するなど、過去の慣習や文化に縛られすぎることなく、イノベーションを生み出すようなまち全体としての雰囲気を醸成することが重要だと考えています。

### 「挑戦できるまちとして好循環を生み出す」

市内の大学生は、少なくとも 4 年、長くて 9 年もの期間、若い時代を北九州市で過ごすことになります。その際に「北九州市」にいかに共感をもって関わってもらうのかといった点を大切にしなければなりません。

また市内で大学時代を送った方は、他のまちに移り住んでも北九州市で過ごしたことを覚えています。若い方々にとって、新しい挑戦ができるという雰囲気があるならば、帰ってきてくれる可能性があると思います。そうすれば、帰ってきた方々と学生で、さらに新しいことができるといった好循環につなげることができるのではないでしょうか。

現在、当大学ではベンチャー約 3 社にオフィスを貸し出し、学生もそこで働くなど、小さくはありますが好循環が生まれています。これをまち全体の好循環につなげていくことができれば良いのではないかと考えています。

### 「不可能を可能にするチャレンジングなまち」

単独では難しいようなことであっても、北九州市に来れば、周りのサポート環境が整っていて、必ず実現できるといった、「不可能を可能にするチャレンジングなまち」であってほしいと思います。